

第12章-3 中国近代史

(1) アヘン戦争 (1840-42)

<イギリスと清の貿易>

- ・片貿易 (1699 清がイギリスとの貿易許可～1773)
 - 清…… 公行(コホン) (=特許商人組合) の独占
 - 英……東インド会社の独占
 - イギリスは茶、絹、陶磁器 etc.輸入、しかし輸出は必ず多額の銀支払い
- 清… 1757年 外国貿易を広州 1港に制限
↑↓
- 英… マカートニー (1793)、アマースト (1816) らを派遣し制限撤廃要求 (乾隆帝に会う) (嘉慶帝と会えず)
- ・ 三角貿易 (1773 英東インド会社がアヘン専売開始～) = 貿易赤字打開へ
 - 英→印……綿織物 (産業革命の成果)
 - 印→清……アヘン (インド人に強制栽培)
 - 清→英……茶、絹、陶磁器 etc. + 銀 (貿易黒字)

→ 1796 清、アヘン輸入厳禁 (→イギリスは密輸で暴利)

<戦争へ>

- 1839 清、林則徐 を 欽差大臣 (皇帝の特命による大臣) に任命、広州 派遣
→アヘンを没収廃棄
↓
- 1840-42 アヘン戦争 ……イギリスの勝利、対中国最初の侵略戦争
- 1842 南京条約
 - 上海・寧波・福州・厦門・広州 の5港開港
 - 香港島 をイギリスへ割譲
 - 公行を廃止、自由貿易
 - 対等外交と領事駐在の承認
 - 賠償金 2100 万両 (銀\$ = 貿易銀ターラー)
- 1843 虎門寨追加条約 ……不平等条約
 - 片務的最恵国待遇
 - 領事裁判権 (治外法権)
 - 関税・通過税協定 (関税自主権無し)
- 1844 望厦条約 (アメリカ)、黄埔条約 (フランス) ……上と同様の内容

※ 1841 平英団事件 (三元里事件) ……広州近郊の三元里の民衆が武装蜂起しイギリス軍部隊を苦しめた
植民地化に対する民族抵抗運動も第一歩

(2) アロー戦争(1856-60)

南京条約後も、清の条約違反多く貿易拡大せず(条約は皇帝の恩恵、という感覚)
→英は、太平天国の乱勃発に乗じて貿易拡大せまるが、清は応じず

1856年2月 フランス人宣教師殺害事件(広西省)

10月 アロー号事件

イギリス船籍を主張する船の中国人乗組員が海賊容疑で逮捕される

1856～60 アロー戦争

イギリスがフランス(ナポレオン3世)をさそって開戦

1857.12 広州陥落 → 天津へ進撃

1858 天津条約 ……清と英・仏(米・露も便乗)

総理各国事務衙門(=近代的外務省)の設置

外国公使の北京駐在

自由貿易、キリスト教布教

南京、漢口、九江、瓊州など10港開港

清 …… 米露とは批准書交換、しかし英仏との批准拒否

→戦争続行、この時 円明園 破壊

1860 北京条約 ……清と英・仏←露の仲介

天津条約に追加、賠償金増額(600万→800万両)

天津を加えた11港開港

九竜市街地をイギリスに割譲

※ロシアの東方進出

1689 ネルチンスク条約 ……康熙帝とピョートル1世

外興安嶺(スタノヴォイ山脈)を国境とする対等条約

18c初 ベーリングらによるカムチャツカ、アラスカ探検

1727 キャフタ条約 ……雍正帝

1792 ラクスマン、根室来航……漂流民・大黒屋光太夫らを帰国させる

東シベリア総督 ムラヴィヨフ ……太平天国・アロー戦争に乗じて

1858 アイグン条約 ……アムール川(黒竜江)以北を獲得

1860 北京条約 ……ウスリー江以東(沿海州)獲得

→不凍港 ウラジヴォストク 建設、71海軍基地に

中央アジアでも

19c半 ウズベク族の3ハン国(ブハラ、ヒヴァ、コーカンド)支配

1881 イリ条約 ……清と新疆方面における国境画定

(3) 太平天国(1851-64)

アヘン戦争の戦費・賠償金→重税・銀価高騰→各地で民衆反乱

洪秀全 …… 拜上帝会 を組織、自らキリストの弟と称す

〔悪習撤廃（アヘン、賭博、纏足 etc.）、弁髪廃止（→髮匪、長髮族）
男女平等、貧富の差撤廃、財産共有〕

1851 「滅満興漢」を唱え挙兵、広西省金田村を拠点に「太平天国」建国
1853 南京占領、天京と改称し遷都

長江以南の広範な地域を支配、国家機構整備
※ 天朝田畝 制度 …… 土地均分、兵農一致

↓

〔漢人官僚による自衛軍組織 = 郷勇（曾国藩の湘軍、李鴻章の淮軍）
列強 …… はじめ中立、アロー戦争後は清朝に協力〕

ウォード（米船員）のち ゴードン（英軍人）指揮する 常勝軍

→ 太平天国内部分裂

1864 洪秀全死去、南京陥落で乱収束

(4) 洋務運動(1864~)

太平天国鎮圧後の一時的安定 = 同治中興

西洋の技術採用による富国強兵策、スローガン「中体西用」

乱鎮圧に活躍した 曾国藩、李鴻章、左宗棠 らによる

江南製造局（官営洋式兵器工場※）、福州船政局（官営造船所）、招商局（官営汽船会社※）、
北洋海軍※、漢陽鉄廠、開平礦務局（洋式炭鉱、開 ^{カイロワン} 灤炭田※） ※李鴻章の支配
大冶鉄山 → のち日本の八幡製鉄所の原料供給地に

▼ 技術の輸入模倣のみ …… 支配体制の温存強化が目的 → 反体制的な思想排斥
真の富国強兵は達成されず、日清戦争で欠陥暴露

※ 李鴻章（1823-1901）

'47 進士合格、'68-01 内閣大学士、'70-95 直隸総督兼北洋大臣

以後、義和団事件までの外交をすべて担当。没後、その地位は袁世凱が継承

(5) 日本と朝鮮半島の情勢

<日本>

1858 日米修好通商条約 …… 片務的最恵国待遇、治外法権、関税自主権なし

1868 明治維新 → 富国強兵 1889 大日本帝国憲法制定

・ 清と 1871 日清修好条規 …… 日本と清の対等条約

1874 日本の台湾出兵

1879 琉球王国に清への朝貢をやめさせ、琉球藩を廃し 沖縄県 を設置

・ 露と 1855 日露和親条約 …… 択捉島とウルップ島の間を国境とする
樺太は両国民雑居の地とし国境は定めず

1875 樺太千島交換条約

樺太はロシア領、千島列島は全て日本領

<朝鮮>

第26代高宗(1852生、位1863-1907)・・・父・摂政大院君 VS 王妃・閔氏
1873 閔妃が大院君を失脚させ政権奪取

1875 江華島事件・・・日本海軍が朝鮮に対し示威行為、朝鮮が発砲

1876 日朝修好条規・・・釜山など3港を開港させる
清の宗主権否定、日本の領事裁判権(不平等条約)
→以後、閔妃政権は日本に接近

1882 壬午事変・・・大院君ら保守派のクーデタ
→日清両国出兵。清は大院君を監禁し閔氏政権を復活させる

以後、閔氏政権は親清派に転換(事大党) VS 親日派(独立党)

1884 甲申事変・・・独立党(金玉均ら)のクーデタ、日本も援助
→清の出兵で失敗、日清武力衝突の危機

1885 天津条約
日清両国撤兵、今後朝鮮出兵の際は互いに事前通告すると約す

※甲申事変では、日本居留民も虐殺。独立党員と近親者も残虐な方法で処刑。

→独立党を支持していた福沢諭吉は、85年「脱亜論」発表

(6) 日清戦争(1894-95)

1894.3 甲午農民戦争(=東学の乱)・・・指導者全琫準
※東学=1860年頃、崔濟愚(1824-64)が創始した宗教結社
西学(キリスト教)に対し、朝鮮固有文化の維持を提唱、排他的
スローガン「逐洋斥倭」

朝鮮王国はこの鎮圧に手こずり、清に出兵要請

→清は天津条約の規定に従い、日本に事前通告→日本も出兵

→乱鎮圧後も、日清両軍撤兵せず、朝鮮指導権を争い衝突

1894.8~95.3 日清戦争・・・日本勝利

1895.4 下関条約・・・清全権李鴻章、日本 伊藤博文首相・陸奥宗光外相
朝鮮の独立(清の宗主権放棄)
賠償金2億両(日本円で3億1000万円)
台湾、澎湖諸島、遼東半島を日本に割譲

ところが

1895.4 三国干渉・・・(ロシア、フランス、ドイツ)の3国による
遼東半島を中国へ返還するよう日本に圧力、日本はこれに従う
→日露の対立 (賠償金追加3000万両=4600万円と引き換え)

※日清戦争後、日本の推す大院君派が強くなり閔妃勢力は衰退するが、7月に閔妃はロシア軍の助力を得て権力奪還。
しかし閔妃の動きは大院君や日本などの諸外国から警戒される。10月8日早朝、景福宮に日本軍や日本人大陸浪人、
朝鮮の諸部隊らが侵入、その混乱の中で閔妃は殺害された(乙未事変,1895)。親日政権樹立。

第13章-3 アジアの改革と民族運動

(7) 中国分割

日清戦争敗北で「眠れる獅子」清朝の弱体暴露→列強が利権・租借地獲得競争

ロシア・・・1896年 東清鉄道敷設権獲得（三国干渉の代償として）

ウラジオストクから満州横断しシベリア鉄道へ連絡。ハルビンから大連までの支線も。

1896.2 朝鮮でロシア公使の支援によるクーデタ。親露派政権樹立。

1897 朝鮮、国号を 大韓帝国 と改める。

▶ 中国における列強の勢力範囲

租借	1898	ロシア・・・ <u>遼東半島</u> 南部（ <u>旅順</u> 、 <u>大連</u> ）
		ドイツ・・・ <u>膠州湾</u> （ <u>青島</u> ）
	イギリス・・・ <u>威海衛</u> 、 <u>九竜半島</u> 全域（香港も含む）	
	1899	フランス・・・ <u>広州湾</u>

勢力範囲・・・独占的な鉄道敷設権・鉱山採掘権などを獲得

英・・・	長江沿岸、舟山列島（長江河口域の群島）、チベット
仏・・・	海南島、広東・広西・雲南各省
露・・・	長城以北
日・・・	福建省
独・・・	山東省

アメリカ・・・1898 米西戦争でフィリピンなどを獲得しアジア進出狙うが一步出遅れ
→ 1899 門戸開放宣言・・・国務長官 ジョン・ヘイ（マッキンリー大統領政権）
中国の 門戸開放、機会均等、領土保全 提唱

(8) 変法運動(1898)

欧米の技術だけ（洋務運動）ではなく政治制度も取り入れる必要痛感

1898年6月～ 戊戌の変法・・・康有為（公羊派）らによる←光緒帝の信任

⇕

同年9月 戊戌の政変・・・保守派は西太后（光緒帝祖母）を擁してクーデタ
光緒帝幽閉、改革派処刑、康有為は日本亡命

以後、西太后のもとで保守排外主義（このクーデタで、実働部隊を率いたのが袁世凱）

(9) 義和団事件(1900)

列強進出への反感→各地で反キリスト教運動（仇教運動）

※ 義和団・・・山東半島におこる ⇔ ドイツの進出・布教

1897年に、義和拳と称する武術団体がキリスト教会襲撃

1899年、山東省から直隸省（北京周辺から天津一帯）へ展開

1900年6月 義和団事件（北清事変）・・・義和団、北京入城

外国公使館区域包囲（日本公使館書記官やドイツ公使を殺害）

スローガン「扶清滅洋」

→ 西太后もこれに乗じて列強に対し宣戦布告



列強 8 カ国共同出兵……日・露・英・仏・米・独・奥・伊

英は南ア戦争、米はフィリピン反乱で余裕なし。日露中心。同年 8 月、北京陥落

1901 年 9 月 北京議定書 (= 辛丑 和約)

清 (李鴻章) vs 8 カ国 + ベルギー、オランダ、スペイン

賠償金……各国への総額 4 億 5 千万両銀
(39 年分割、年利 4 % → 1938 年までに総額 6 億 5 千万両で終了)
北京公使館区域内への駐兵権 (事実上第 2 次大戦終結まで)

(10) 日露戦争(1904)

ロシア { 義和団事件後も撤兵せず満州支配、朝鮮へも勢力のばす
朝鮮……日清戦争後の日本支配きらいロシアに接近
フランス……露仏同盟
ドイツ……暗黙の支持 (露を極東進出させ、自らはバルカン半島へ)

日本 { イギリス……西アジア・インド北辺でロシア南下と対立
1902 日英同盟
相互好意的中立、第三国参戦の場合は参戦を約す
アメリカ……好意的。(戦後の日本からの便宜を期待)

1904 ~ 05 日露戦争

日本は全力投入で軍事的勝利するも国力消耗
ロシアは第一革命で戦争継続困難に

英米……日本の大陸進出警戒 1904 英仏協商 (両国とも参戦せず)

米大統領 セオドア・ローズヴェルト……停戦させ勢力均衡を図るのが得策と考え講和斡旋

1905 ポーツマス条約……日本全権 小村寿太郎、ロシア全権 ウイッテ
日本は 樺太 南半、遼東半島南部租借権、南満州鉄道 を獲得
(旅順、大連)

※歴史的意義……最初の帝国主義列強間の戦争

ロシアが極東から撤退したことで、長年の英露の対立が解消

日本の勝利が、アジア諸民族の民族独立運動を勇気づける

<以後の国際関係>

1907年 ハーグ密使事件 (高宗が万国平和会議に派遣)

日韓……3 次にわたる 日韓協約



第 1 次 (1904)、第 2 次 (1905 = 統監府 設置、外交監督)、第 3 次 (1907、内政干渉)

1909 伊藤博文 (初代韓国統監)、ハルビン駅で 安重根 に暗殺される。

1910 日本、韓国併合。朝鮮総督府 設置。(初代総督・寺内正毅)

英露……1907 英露協商 = 三国協商完成 (→後述)

日露……1907 日露協約

日英……1911 日英同盟改定 (対ドイツ)

日米……日本は満州鉄道の共同経営を断る。→関係悪化

(11). 辛亥革命(1911)

義和団事件後の清朝の改革（公緒新政）

1905 科挙 廃止

1908 憲法大綱の発表、国会開設の公約・・・満州人本位のまま

民間・・・民族資本による近代工業化、外国利権回収はじまる。

↓

政府・・・賠償金支払いのための増税。外債を受けるために利権を外国に提供。

→民族資本家・海外華僑も、農民・労働者とともに革命勢力となる。

◎ 孫文 (1866-1925)

広東出身、ハワイ留学後、香港で医学を学び、マカオで医師開業。清仏戦争後、政治に関心。

1894 興中会 結成（於 ハワイ）

日清戦争後、広州での武装蜂起に失敗し日本に亡命

1905 中国同盟会 結成（於 東京）

光復会（浙江派華僑）、華興会（湖南派華僑）も参加

※ 三民主義・・・民族 独立、民権 伸張、民生 安定

4大綱領・・・驅除韃虜、恢復中華、創立民国、平均地權

▶ 革命のきっかけ

1911.⁵ 清朝が財政策として外国借款を受けるため幹線鉄道を国有化

.⁹ 四川暴動・・・国有化反対運動。以後も各地で。

<第一革命>

1911.¹⁰/₁₀ 武昌 で軍が挙兵・・・辛亥革命 始まる

→年末までに 14 省（80%）が清朝から独立

1912.¹/₁ 中華民国 建国。臨時大總統・孫文。首都 南京

↓

清朝・・・袁世凱 を総理大臣に起用

しかし袁は革命派と交渉し、清朝打倒の代償に大總統位を要求
資金難の革命派もこれを容認

2 月 宣統 帝退位、清滅亡。

※ 「ラスト・エンペラー」愛新覺羅溥儀
(1906 生、位 08-12)

4 月 袁世凱、北京で臨時大總統就任。

8 月 孫文、国民党 結成 ⇔ 袁世凱の弾圧、外国援助で独裁

<第二革命>

1913.⁷ 国民党、江西で挙兵失敗 →孫文、日本亡命。国民党解散。

.¹⁰ 袁世凱、正式に大總統就任 → 1915 日本の「二十一ヶ条要求」受諾

<第三革命>

1915.¹² 袁世凱、翌年からの帝政計画 ⇔ 内外の反対

1916.³ 帝政計画撤回

.⁶ 袁世凱病死 → 中国は軍閥割拠時代へ

アジアの民族運動

<インド>

英領インド……ムガル帝国諸侯存続。インド人内でエリートとそれ以外の格差。

- 1885 英、総督の諮問機関として インド国民会議 招集（於ボンベイ）
インド人地主・知識人階級ら
→日露戦争に刺激されて、民族運動の中心に
- 1905 英、ベンガル分割令 ……抵抗運動の分断図る
↓
ベンガル州をヒンドゥー・イスラム両教徒居住地域に東西分割
- 1906 国民会議、カルカッタ 大会、4 綱領決議。指導者 ティラク
スワデーシ、スワラージ、英貨排斥、民族教育
(国産品愛用) (自治)
- 1906 英、全インド・ムスリム連盟 結成支援 (⇔国民会議はヒンドゥー中心)
- 1911 英、ベンガル分割令撤回
帝国首都をカルカッタから旧都デリーへ移す

<インドネシア>

1911/12 サレカット・イスラーム (イスラム同盟) 結成

<ヴェトナム>

ファン・ボイチャウ (潘佩珠) ……1904 維新会 結成 (→ヴェトナム光復会)
日露戦争に刺激→ ドンズー (東遊) 運動 = 日本留学
⇔ 1907 日仏協約で、日本はヴェトナム留学生を国外退去さす

※パン・イスラム主義…… アフガーニー (1838-97)

→エジプトのウラービー運動、イランのタバコ・ボイコット運動に影響

<イラン>

- 1891-92 タバコ・ボイコット 運動
カジャール朝がイギリス商人にタバコ独占権を認めたことに対する抗議運動
- 1905-6 立憲革命 ……フランス人権宣言の影響を受けた憲法制定
→英・露の介入、11 年、ロシア軍により議会閉鎖

<オスマン・トルコ>

- 1877 露土戦争→ミドハト憲法停止
- 1889 「統一と進歩委員会」結成……トルコ人知識人・将校ら憲法復活めざす
↓
- 1908 青年トルコ革命 (無血革命)
皇帝に迫り、ミドハト憲法を復活。政権握る。
- しかしトルコ人第一主義で、支配下アラブ人の反発。
やがて反動化。